

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県公立学校講師)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

挙手しなくてもいいよ!

全員に発表の機会を保障することを一義にし、名簿にチェックしながら授業を進める教師がいます。子どもを大事にしようという親心でしょうが、授業は探求の場、考える場です。考えを深める場、広める場です。全員に挙手で発表させることを望むのは現実的ではないでしょう。今回は教師が挙手を求めなくても授業が成立するというお話です。ただし、「指名なし発言」ではありません。

1 挙手のタイミングを限定すると 授業は活性化すると

教師が発問したと同時に、「はい、はい」と挙手する子どもがいます。

自分の考えをノートに書いた形跡はありません。思いついたことを話したいという感じですが。

Q1 挙手した子どもを指名しますか。

- ① 指名する
- ② 指名しない

①のように子どもが挙手したら「はい!○○さん」と条件反射的に指名してしまいます。これに異を唱える人はいないでしょう。教師は子どもが挙手すると、「空白の時間を回避できた」と安心します。また、指導案どおりに進められるという保障を得られます。

発表が正解の時は、「そうだよ」と次のシナリオに進めます。誤答の時は、「そう思った理由を教えてください。先生は君の考えを知りたい」と考えたことを評価しつつ、意見の多様性を追求することができません。

授業としては一見活発のように見えますが、「挙手→指名」を続けていると、発言者が固定されてきます。

こうなると、挙手しない子どもの緊張感は緩みます。それは伝播して、授業に参加する子どもとそうでない子どもと教室を二分することになります。

挙手する子どもは自分の解答に自信がありません。挙手しない子どもは解答に自信がありません。誤答は恥ずかしさを覚えます。そんな思いをせずにすむには挙手しないことです。また、「他の人が言うだろう」という他者依存の心理もはたります。

「挙手→指名」は教師の安心感、できる子どもの満足感、自信のない子どもの隠れ蓑になっているのです。

それに対して、②だとどうなるのでしょうか。それに対して、②だとどうなるのでしょうか。まず、教師が発問したら自分の考えをノートに書かせます。

教師は机間指導しながら、子どものノートに「赤」を入れます。誤答は「○」、参加賞です。考えることに意義があるからです。

正解には「◎」を入れます。授業をしていると、教師の予想を超える子どもの考えに出逢います。そのときは「これは素晴らしい」と言いながら、「花丸」をつけます。

一巡したら、「◎をもらった人」「花丸をもらった人」と順に聞きます。この確認によって、子どもには「◎は◎」「へ」「◎は花丸」へステップアップしたいという意欲が生まれます。

こうして二巡目に入ります。時間がなかったり、自分の考えを整理できなかったりした子どもが



もがこの機会を生かします。いずれにしろ、子どものノートには変化があります。

二巡目は子どもの意欲を引き出すためだけに言うわけではありません。指名計画を立て、発表の順番を決めます。

教師が子どもの机をトントンと叩きます。発表してくださいという合図です。発表の順番は教師が決めます。「あなたは一番目」「あなたは最後」と順番を伝えます。指名計画は授業の構成化につながります。

指名した子どもの発表が終わると、「同じ理由だった人」と、ここで初めて挙手を促します。指名されていない子どもの中には、発表者と同じ意見の子どもがいます。彼らは自分と同じ意見だと安心して挙手できます。

また子どもは、時には友だちの意見を疑問に思ったり、反対したくなったりします。そのと

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。

ベテラン先生によるケーススタディです。

こんな時、あなたならどうしますか？

さも挙手を許し、発表させます。すると、緊張感が漂い、クラスの雰囲気が一変します。自分と異なる意見を耳にすると、脳が刺激され、反応するからです。

また、異なる意見を是々非々の立場で受け入れ、頷く子どももいます。教師はそれを見落とすことなく「賛成なの？」と促し、自分が意見を変える理由を聞きます。柔軟な聞き方をして、いることを評価します。

頷きや眩きが認められる環境下では、全て「挙手↓指名」する必要がなくなります。

2 意見を確認するとき、挙手は必要ない

自分の立場を決めさせるために、賛成か反対かの二者択一の発問をすることがあります。

Q2 どうして確認しますか。

- ① 挙手させる
- ② 起立させる

挙手でも起立でもその前にさせることがあります。それは、自分の立場を決めることです。決めたらそれをノートに書きます。

賛成・反対などの二者択一とはいえ、子どもは確信を持っているわけではありません。考えは揺れています。

それでも自分の立場を明確にさせます。立場を決めるとそこに向かって進もうとします。そこを目指して道を作ることになります。

授業は仮説の検証です。立場を決めることでそれに沿った根拠を見出すことになります。

その上で①のように挙手させると、ノートに自分の立場が書いてあるので、迷うことなく挙手できます。

それを見た教師は理由を聞きたくありません。そこで「挙手↓指名」の形式ではなく、教師が発表の順番を決めるため、挙げた手を下ろさせます。すると、誰が挙手していたのかわからなくなります。

教師は、「もう一度挙手して」と子どもたちにお願いくることになります。結局、誰を指名して良いのかわからなくなります。

②のように起立させるとそれが解決します。起立させたら、まずは指名せずに、起立させた子どもたち全員に向かって「どうして？」と判断なく聞きます。起立から発表までに間ができるとせつかつくの緊張感が緩みます。起立したらすぐ「動く」ことで授業はテンポアップします。

次に教師が発表の順番を決め、指名していきます。



ます。突然聞かれて発言しなかったりまとまりのない発言をしたりした子どもには、「わかりました。もう一度聞くからそれまでに自分の意見をまとめておいてね。また、途中で発表できそうなら声をかけてください。そうしたら指名するから」と言い残して、次の子どもを指名します。意見を言い終えた子どもは着席します。立ったままの子どもたちは他者の意見を聞くという意識が高まります。自力で理由を考えようとしたり、発表している友だちの理由を参考にしたり、隣の席の友だちと相談したりします。いずれにしても理由を考えようと頭を働かせ始めます。

考えがまとまった子どもの中には、教師に声をかける時、思わず、「はい」と挙手する子どももいます。この挙手は発言したいという意欲ではなく、発言させてくださいという意味です。着席するためには発言をしなければなりません。「○○さんと同じ意見です」といったように、

子どもの意見は重なる場合もあります。そのときは、「どこが同じなの」と聞きます。これで、友だちの意見をきちんと聞いていたかどうか判別できます。「友だちの意見を聞いていないければ着席できない」「なぜ同じなのか、理由を言わなければ着席できない」という暗黙の了解ができあがります。

通常は発言したい子どもが挙手しますが、全ての子どもがそうではありません。例えば、「ささやき」がそうです。ささやきは「私語」とも書きます。せつかつくの考えを「私」だけにしておくのはもったいないことです。ささやきを全体に広め、「公語」にしたいものです。

ささやきを全体に広め、「公語」にしたいものです。